

植村 研一

うまい英語で医学論文を書くコツ

(A 5 判 236 頁 2,987 円 (税込) 1991 年 医学書院 刊)

亀山 正邦

(住友病院)

植村研一教授「うまい英語で医学論文を書くコツ」(医学書院, 1991 年)を読んだ。いつもの氏の軽妙な語り口で、一気に読ませられた感じである。しかし、氏の 40 年以上にわたる英語歴の重みが各頁に満ちている。

うまい英語、気持ちのいい英文 (comfortable English) の条件として、論点が簡潔かつ明快に述べられていることが重要である。氏の英文誌編集や英文校正の長年の経験をもとに、米英人に通じる英文の特徴や内容が、詳細に述べられている。その中の要点をとりあげてみると、①日本語の医学用語には動詞がない、名詞に「する」をつけて動詞化しているのが日本語であるが、英語の動詞に習熟することが必要である。②受動態と能動態をうまく使い分ける。by を使ってまで行為者をいう必要があるなら、最初から能動態を使う。著者自身の originality を主張す

るときは、著者を主語とする能動態を使う。意見を発表する場で受動態を使うのは大きな誤りである (Robbins)。できるだけ be 動詞を避ける (動詞全体の 1/3~1/4 にすべきである。③ of の反復はできるだけ避ける。④冠詞の使い方——これはどの本でも悩みの種であるが、ある程度、法則的なものはある。冠詞を使っても使わなくてもよいときには、全体的に英国人は必ず付けるが、米国人はなるべく省く傾向がある。⑤ by と with の使い分け。⑥米国の医師はできるかぎりラテン語を避ける傾向にあり、epigastralgia などは余り用いない。⑦ case と patient の使い方。⑧ may, can, would, could などを使わず、現在形でストレートに表現の方が科学論文では普通。⑨~の立場・視点から——という表現は、英語ではあまり使われない。⑩neurological, physiologic などに対する neurologic,

physiologic などの短縮形は品位を下げる可能性があるのでは、日本人は避ける。⑪要約 (summary) と抄録 (abstract) との違いをわきまえる。要約は論文の一部であり、本文と切り離して出版する意図はない。しかし、抄録は出版される論文の中に含まれ、通常はすぐ目に入るように論文のはじめに置かれているが、論文とは別に出版されることが意図されている。⑫日本では論文の書き方はもちろん、人前での発表の仕方 (public speech) もどこでも教育されておらず、いかに話すか (how to make speech) も、日本の教育システムには全く含まれていない。アメリカの高校では “public speech” か “drama” が必須になっている。

以上のような趣旨の下に、基礎編、添削例の総合的解析 (100 題)、原文と訂正文の対比 (100 例)、Robbins 氏との対談などが書かれている。私にも苦い経験があるが、訂正文を読んで、リズミカルでわかりやすいことに感心した。私どもの英語力の盲点を親切に、かつ辛らつに解きほぐした名著として推薦する次第であり、植村教授にはぜひこの続編を書いていただくことを期待する。